

社説

二〇〇七年度に全国の国公私立の小中高生が学校内外で起こした暴力行為が、過去最多の五万二千八百件となったことが、文部科学省の調査で分かった。

小学校が前年度比37%増の五千二百件、中学校も同20%増の三万六千八百件と、低年齢化が一段と進んだ。暴力行為の態様では、生徒間暴力が同22%増の二万八千三百件に上っている。

自分の感情をコントロールできない。言葉より先に手が出る。そんな傾向がますます強まっているということである。人は一人では生きられない。他者と社会で生きていくための基礎となる対人関係能

力は、まさに生きていくための基礎である。それが身につけていない子どもたちが増加しているのは、社会にとっての危機でもある。

わる体験を通してしか育つものではない。小さいときに怒りなどの感情を他者にぶつけ、それを親など他者に受け止めてもらう体験を通して、次第にそうした感情と向き合えるようになる。

依然、相当数に上っている。いじめは、対人関係などで傷ついた自我を手取り早く回復させる手だての一つでもある。対人関係能力が低下すればするほど、いじめはまん延する。

数だけで一喜一憂するのはやめた方がいい。減ったとすれば、学校が認知できなかっただけ、との解釈もできるからだ。実際、今回の調査でも、アンケート、家庭訪問、個人面談など実態把握に積極的に取り組んだ学校ほど認知件数が多いとの結果が出ている。

子ども問題行動調査

対人体験の機会や場をつくらう

怒りや悲しみ、不安や憎しみなどの感情は誰もが抱えている。社会で生きるためには

盤が育っていないければ、規範を説いてもピンとくるわけがない。少子化や地域の崩壊で、失われた子どもの対人体験の機会や場をどうつくるか、学

「どの子どもにも起し得る」のである。子どもが集団で過ごす学校で、ストレスと無縁

トを利用したいいじめのように、加害者の特定が困難なケースも多い。

必要だ。暴力行為の増加は、そうした感情を言葉で処理できず、そのまま他者にぶつける傾向が一段と強まったことを示している。

力問題以上に取り組む必要がある。いじめの問題も同根だ。今回の調査では、いじめ件数は前年度から二万三千七百件減り

を他者に向けて済ますことができないような力をつけることが大切だ。

まずは子ども自身に、怒りなどの感情と向き合える力をはぐくまなければならぬ。規範教育を強めてそうした感情やストレスを単に封じ込めたのでは、かえって暴力もいじめも増えるだけに終わりは

そうした力は、他者とかかり十萬一千百件となったが、減ったか、学校が認知した件

り得る「いじめが、増えたか減ったか、学校が認知した件

しないか。